高崎市立美術館における
連携事業の実践に関する報告

奥　西　麻由子

Report on the Practice of Collaboration Project in Takasaki City Museum

Mayuko OKUNISHI

Ⅰ　はじめに

本研究は、筆者が平成25年度から継続して[1] 群馬県内における美術館での連携事業を進めてきた実践のうち、今年度新たに学生が企画展に携わった事業の報告を行うものである。これまで、群馬県立女子大学紀要35号（2014年）「富岡市立美術博物館における学生による教育普及プログラムの開発と実践」[2] および、同紀要38号（2017年）「群馬県立館林美術館における教育普及プログラムの開発と実践」[3] に関しては、学生が教育普及プログラムを考案し、実施するというかたちでの報告であった。このような実践は継続して今年度も他の美術館で行われている[4]。

ここで取り上げる２つの高崎市立美術館の実践は、学生が夏の企画展に作品展示ボランティアや学芸員実習の一環として教育普及事業のサポートを行うという、これまでの連携事業のかたちには見られなかったものである。本稿ではこのような連携事業に至る背景を述べた後、実際の事業の内容を述べ、学生たちの意識の変化等の考察を行う。本事業により、学生たちは大学でアートマネジメントの授業を受講し、実際の現場に入って活動を行うことで、講義中とは異なった学びを発見することとなった。また、理論と実践という双方の側面から事業にかかわることで、様々な諸問題に触れ、美術館を運営する立場に関わりを持ち、芸術活動を支えることの意味を模索することとなった。

Ⅱ　連携事業に至る背景

１．高崎市立美術館との連携事業

これまでに高崎市立美術館においては、平成26年度に企画展にちなんだワークショップ「ステンシル版画でエコバックをつくろう！」を開発、実践する取り組みを行った。前年より群馬県内の３つの美術館で学生が教育普及事業の一環として、教育普及プログラムを考案しているということを記録集[5] で紹介したところ、事業の開催に至った。

その際は企画展「アンリ・マティスの JAZZ ‼―ヨーロッパ版画の黄金時代」にちなんでステンシル版画を扱うこととした。学生が予めたくさんのステンシル型を作成しておき、参加者は自由に気に入ったものを選択し、自身のエコバックに型を当てインクをつけて装飾していくというものであった。（図１、２）ここでは参加者は事前に予約をして、美術館に隣接する南公民館５階の調理室で行った。小学生を主に、計18名の参加があった[6]。

図１　ワークショップの様子

図２　活動をサポートする学生たちと参加者

２．今年度の連携事業に至る経過

前述の活動終了後に、筆者は先方の学芸員と今後も機会があれば連携事業を展開してくという話を行い、その後数年はワークショップを行う機会がなかった。その理由として高崎市立美術館は多くの参加人数に対応できる活動場所がないこと、各企画展では関係する作家等が１～２回普及事業を行うことが多いため、学生たちと特別に連携を行う必要がなかったためである。

そのような中、2019年３月の時点で、先方の学芸員から前回の形とは異なる連携を図れないかという打診があった。具体的には、一つ目に夏の企画展の展示作業ボランティア、二つ目に企画展にちなんだワークショップの実施である。一つ目に関しては、７月から開催される企画展「３は魔法の数字 three is a magic number 14」[7] は、身近な材料を大量に組み合わせたインスタレーション作品を多く出品するため、会期前に展示作業の協力が必要であることが挙げられた。筆者に依頼をした理由としては、高崎美術館にはボランティア制度等がないということ、作業に協力するボランティアを新規に募集するとしても様々な手続等で労力がかかるということ、美術系の大学で学んでいる学生であれば興味関心を引いてくれるのではないかと考えたから、とのことである。二つ目は大学が協力というかたちを取れるのであれば、関連事業としてワークショップの開催も行い、連携を強化していきたいとのことであった。

こういった形式の連携事業はこれまでにはないものであると同時に、学生が作家の制作現場に立ち会うことが出来、美術館の裏側の活動を知る機会にもなる。芸術活動を支えるアートマネジメントの現場体験として有意義なものになると考えられた。そこで、４月からの筆者の授業「アートマネジメント特講１」、大学院「アートマネジメント特殊研究１」の内容に組み込むということで了承をした。個別に活動に参加したいという学生を募る方法もあったが、５日間の展示作業においてはある程度の人数が必要であったことと、文化ボランティアという活動について多くの学生に体験の機会を提供したいと考え、授業の一環として協力することを決定した。そして、他の美術館の連携事業が夏に集中していたため[8]、ワークショップの実施は筆者が企画を行い、学芸員実習として赴く予定の学生に活動のサポートに当たってもらうこととした。

Ⅲ　連携事業の内容

１．「アートマネジメント特講１」における実践

⑴　実践の目的

一つ目の連携事業、企画展の展示作業ボランティアは２年生が主に受講する「アートマネジメント特講１」の授業に組み込んだ。本講義の授業目標・到達目標は「現代社会におけるアートマネジ

メントの理論と方法を美術館及び文化施設に焦点を当てて学ぶ。その際事例・データを的確に読み取り、客観的に現状を把握出来るようにする。また、ディスカッションによって各施設におけるアートの【送り手】に必要な要素を検討していく。」[9] である。主に美術館や文化ホールの教育普及事業について学ぶため、大学内で基礎的な知識を習得すると同時に、講義のみでなく、毎年群馬県立近代美術館に赴き、教育普及担当の職員から美術館の活動について話をしてもらい、館内を見学している。（図３、４）その後、講義で実際に教育普及プログラムを体験したり、学生がプログラムを考案する演習も行っている。

このような講義が進む中で、アートマネジメントにおいて文化ボランティアという活動も重要な要素となる。これまでは講義の中で文化ボランティアについては具体的な活動の紹介に留まっていたが、今回の連携事業では実際に文化ボランティアを体験することとなる。そこで、本実践の目的を「講義で学んだ文化ボランティアを実際に体験することで、文化活動におけるボランティアへの理解、関心を深める」とした。２年生の段階では大学の講義が中心で、これまで文化ボランティアに興味があったとしても参加する機会が少なかった現状にある。また、どのように参加したらいいのか分からないといったことも挙げられる。また、講義内でその存在を知るだけではなく、自身が実際に美術館の展示を支えるという活動を体験することで、感じたことや考えたことを今後の芸術文化との関わりに生かすきっかけにもなると考えられた。

図３　群馬県立近代美術館でのレクチャーの様子

図４　美術館内を見学する学生たち

⑵　実践の概要

①授業内における講義

今年度の講義は美術館の展示スケジュールを考慮し、学生が実際にスムーズに活動が行えるよう、次のように内容を定めた。15回のうち初回はガイダンス、２回目～６回目が美術館の教育普及活動について（基礎的な講義、群馬県立近代美術館への見学、普及プログラム体験、プログラム企画演習）、７回目～10回目が文化ホールの活動について（基礎的な講義、ディスカッション、企画立案）、そして11回目に文化ボランティアについての講義、その後の12回目が高崎市立美術館での展示作業ボランティア活動、最後の13回目～15回目が調査施設紹介、パワーポイントを用いてのプレゼンテーションである。

この中で、具体的に11回目の文化ボランティアについての講義は次のように展開した。

1）日本におけるボランティア活動の歴史
2）文化ボランティアの特徴
3）文化ボランティア活動の内容
4）文化ボランティアに求められるもの
5）ディスカッション
6）文化ボランティアの意欲向上のための工夫
7）アンケート（事前意識調査）

まず1）において「ボランティア」とは何か、その概要と活動の歴史について簡単に触れた。ボランティア活動には様々な活動があり、文化活動のみではなく、幅広い分野でその活動が展開され、重要視されていること、活動の意義や特徴を伝えた。また、日本においてボランティア活動の歴史は浅く、阪神淡路大震災をきっかけに活動が活発に広がっていったこと、そこから多くのNPO団体の設立にも繋がっていったことを紹介した[10)]。

次に2）においてボランティア活動の中でも芸術分野に焦点を絞り、文化ボランティアとは何か。その特徴について伝えた。代表的な活動として美術館のボランティア、サポーター制度を取り上げ、仕組みや活動の内容、近隣施設で見られる実際の活動や筆者の知る範囲でメンバーの様子を伝えた。特に近年の傾向として、ボランティアも主体的に美術館の活動や普及事業に関わっていること、ボランティア同士が企画を考えたり、話し合いを重ね、実践を行うといった東京都美術館の「とびラー」[11)] や、アーツ前橋の「アーツナビゲーター」[12)] についても紹介を行った。

そして3）においては様々な文化ボランティアの活動について伝えた。2）のような主体的にボランティアが関わる活動も存在するが、そのほかに「イベントの援助、指導」、「資料の整理、保管」、「展示の監視、会場整理、受付」、「館内外の清掃、草木の手入れ」、「刊行物発送作業、チラシの配布」[13)] など美術館や文化施設の特徴に合わせて幅広い活動がある。今回の授業で体験する活動はその中でも展示作業に関わるボランティアであるが、展示作業は基本的には学芸員や専門スタッフ、作家が行うものでボランティアとしての活動は稀であることを紹介した。

4）ではこのような文化ボランティアについて求められる意識、具体的には「美術、芸術が好き」、「何か活動をしてみたいという気持ちが強い」、「活動によって幅広い学びの機会や様々な人と交流したい」といった点を施設側の視点で紹介した後、学生がボランティアを行うなら何を求めるかということについてそれぞれ検討してもらった。続いて5）のディスカッションでは数人のグループで4）について話をしてもらい、文化ボランティアについて思考を深めた。

最後に6）では活動を提供するシステムを整える美術館、文化施設の側からどのようなことを事前に準備、整備するべきだろうかを検討した。またそのノウハウや現場で起こりうるトラブル等についても伝え、学生自身が参加する側と提供する側の二つの側面から文化ボランティアへの関心を高められるようにした。そして7）では簡単なアンケートにより事前意識調査を行った。このことについては「Ⅳ　考察」で詳しく述べることとする。

以上のように、本授業では連携事業に携わる前に様々な基礎知識を得てから、実際の活動を体験することとなり、講義内で考えたことや感じたことが実際の現場でどう生かされるか、また体験から何を学ぶことが出来るか、個々の学生の変化にも着目出来ると考えられた。

②連携事業の流れ

次に美術館との連携事業を展開するにあたり、具体的な流れを次の表1にまとめた。ここでは期日と美術館側、大学側（筆者の活動、連絡、授業での展開）、学生側の活動内容を記載してある。また、斜体の部分がワークショップの活動について記載、その他は全て展示作業ボランティアの活

動である。

全体の流れとしては、３月に美術館側から連携事業の依頼を受け、筆者が授業等で関わることを同意した後、担当学芸員と美術館で打ち合わせを二回ほど行った。（3/27、4/25）４月のオリエン―テーションでは、展示作業ボランティアを行うことを伝え、学生にも周知を行った。そして本事業を進めるに当たり、チラシ等の記載については美学美術史学科で相談した後、「群馬県立女子大学文学部美学美術史学科」として協力することを承諾した。また、ワークショップは作家が人体フィギュアをモチーフにした作品を展示することから、「フィギュア de ペイントジオラマ」とし、作家から提供してもらったフィギュアを用いてジオラマを作るという内容で筆者が試作等を行っていった。５月には美術館側のチラシの確認を行うと共に、ボランティア活動日に参加可能かどうか、一次案として学生に意思の確認を行った。美術館側から各日３名ずつ10時から17時までの時間帯を依頼されていたが、一日参加できる学生は授業等でいないため、最低２時間程度参加できる時

表１　美術館連携事業の流れ

日付	美術館側（連絡等）	大学側		学生側（活動）
		筆者の活動、連絡	授業での展開	
３／７	連携事業の打診（メール）	連携事業の承諾、検討		
３／27	美術館にて打ち合わせ（スケジュール等）			
４／４		群馬県立女子大学文学部美学美術史学科として協力することを承諾		
４／８			「アートマネジメント特殊講義１」での授業ガイダンス	ガイダンスにて授業計画把握
４／10		*ワークショップ試作制作*		
４／11	*フィギュア提供のお願いを作家に行う*		アートマネジメント特講１での授業ガイダンス	ガイダンスにて授業計画把握
４／25	*美術館にて打ち合わせ（ワークショップサンプル等）*			
５／17	チラシ記載等の確認依頼	チラシ記載等の承諾		
５／23		美術館へ学生の意向を連絡	ボランティア参加意思の把握	活動可能日提出
６／12			*「学芸員実習Ⅲ」事前指導ワークショップ補助の連絡*	*高崎市立美術館への実習生は概要把握*
６／21		活動確定版学生リストを送付	参加学生、スケジュール記載	
６／27			文化ボランティアの講義アンケート調査（事前）	活動可能日最終確認
７／４	駐車場の手配など確認	最終確認、報告		
７／５	学生へのボランティア活動指導（活動内容を伝え、方法等の指導を行う、作家及び学芸員からの作品解説を含む）	連絡等（メール）		活動１日目
７／６		活動視察、状況把握		活動２日目
７／７				活動３日目
７／８				活動４日目
７／９		連絡等（メール）		活動５日目
７／11			アンケート調査（事後）	感想提出（順次）
７／25		*ワークショップ説明、作品制作指導、当日の動きなどの確認連絡（補講対応）*		*ワークショップ作品試作制作（学芸員実習生）*
７／31				感想提出締切
８／１		学生の感想送付		
８／24	*活動補助、会場等準備*	*ワークショップ実施*		活動補助
８／30		参加者アンケート送付		

間を検討してほしいことを学生に伝えた。また、どうしても参加できないという学生に関しては、展覧会開始後に美術館の展示を見学するということを課題とした。約一か月後の６月に、学生は再度参加可能な曜日、時間等を申告し、筆者がリスト化して美術館側に送付した。なお、活動当日までに若干変動した内容はその都度美術館に伝えた。そして６月27日に文化ボランティアについての講義を行ない、７月４日から９日まで展示作業に携わった。その際美術館側の担当学芸員の方には、活動について方法等の指導を行ってもらうと共に、時間に余裕のある際に作家と交流を図れるように努めてもらった。筆者は６日（活動二日目）に会場に行き、作家への挨拶、学生の様子を把握した。活動が全て終了した７月には、学生からどのような活動を行ったか、またその感想を300字程度記載したレポートを提出してもらい、８月までに美術館側に送付した。

ワークショップに関しては、高崎市立美術館に学芸員実習に行く３名の学生を集め、６月の事前指導の際に連絡をしてから、７月に筆者の研究室でサンプル作品を作った。実際に当日使用する材料などを事前に把握し、学生も自ら作品制作を行うことで、ワークショップ内容への理解を深めると共に、参加者への適切なアドバイスを行えるようにした。その後は８月24日の当日に実習の一環として事業を行い、８月末にはワークショップ参加者に記入してもらったアンケートをまとめたものを美術館側に送り、全ての連携事業が終了した。

③美術館における活動

５日間の活動日は、学生がそれぞれ決められた時間に美術館に赴き、予定時間まで作業を行うといった様子であった。主に学生が関わった作業は、前半（５、６日）は２Ｆに展示するだるまのインスタレーション作品の裏に両面テープを貼ることであった。実際の壁面への展示作業は作家が行ったが、その補助として強力両面テープを張る作業を行ったという。「作業内容は、たくさんの

図５　だるま作品の裏側に両面テープを張る様子

図６　担当学芸員から話を伺う様子

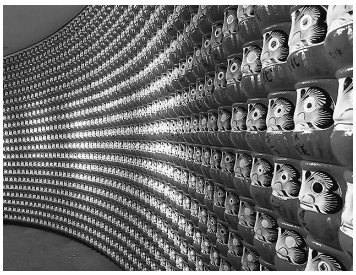

図７　設置完成後の様子（２Ｆ）

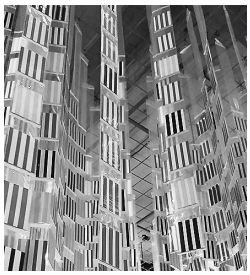

図８　ミシン目を入れた作品

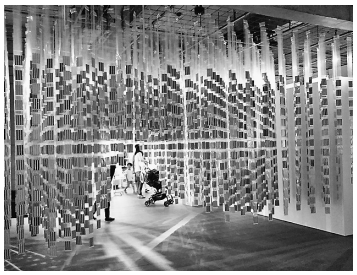

図９　設置完成後の様子（１Ｆ）

だるまの裏の四つ角に両面テープを切って貼るというものだった。」と学生も後日提出した感想で述べていた。（図５、６、７）

後半（７、８、９日）の作業は１Ｆの会場入り口に展示するインスタレーション作品のビニールにミシン目を入れることであった。「広告フライヤーが連なって入った袋に切れやすいようにミシン目と切りこみを入れる活動をした。」と学生は同じく感想で述べていた。（図８、９）どちらも参加した時間一杯、同様の作業を連続して行っていた。インスタレーション作品のため、このような単純な作業に繰り返し関わることになったようである。

その中で活動の途中で時間に余裕があったり、作業の合間には、作家や学芸員と対話をしたり、どのような作品になっていくのかということを伺うこともできたようである。しかし、作業がスムーズに進まないといった場合には交流を図ることは困難であったため、作業を継続するという様子であった。また、学生たちは自由に休憩を取ったり、自動販売機の飲料を無料で使用させてもらったりと活動に携わりやすい配慮をいただいた。

２.「アートマネジメント特殊研究１」における実践

同じく展示作業ボランティアには、大学院の授業「アートマネジメント特殊研究１」を受講する学生にも携わることとして授業に組み込んだ。本授業の授業目標・到達目標は「アートマネジメントに関する具体的な展開をもとに、調査・研究を行う。雑誌・チラシ・報告書などのデータ分析及び現地調査などを通して、今日における芸術と社会の関わりについて考察する。本授業を通して、アートマネジメントの実践の場からこれからの可能性を見出していく。」[14] であり、各々が興味を持ったテーマについて資料、文献、実地調査を行いデータとしてまとめるという内容である。しかし、本年は受講した院生２名共に実技ゼミの学生であることから、調査のみでなく、アートの現場体験、特に作家と触れ合うことの出来る場において展示やその方法について学ぶことが可能になるということから、連携事業に携わることとした。

そこで本実践の目的を「文化ボランティア活動を体験することで、美術館の展示作業や作家との交流、関心を深める」とした。二名の学生は、大学内では様々な展示を学生同士で行っているが、プロの作家がどのように展示を作り上げていくのか、その裏側を体験することで、自身の作品制作や活動にフィードバックしていくことが出来るとされた。なお、実践の概要は前述のものと同様に、活動可能日を事前に調査し、学部二年生と一緒に展示作業に当たった。

３.「学芸員実習Ⅲ」における実践

(1)　大学内における演習

二つ目の連携事業、企画展にちなんだワークショップの実施は、高崎市立美術館に８月に「学芸員実習Ⅲ」として実習に行く学生たちの活動として組み込んだ。学芸員実習の日程を決める以前に本連携事業の打ち合わせを行ったことにより、学生たちの実習の最後の活動として、教育普及事業のサポートを行うことで、美術館側と合意した[15]。

大学内では前述の表１の６月12日に「学芸員実習Ⅲ」の事前指導として、高崎市立美術館に行く学生は実習最終日に筆者が講師をつとめる「フィギュア de ペイントジオラマ」というワークショップの補助を行ってもらうことを伝えた。また、これは美術館の教育普及事業としての実践であると紹介した。そこで、ワークショップの試作を７月25日に行った。学生たちにはワークショップ参加者に提供する予定の材料を使い、自由に素材を選択したり、フィギュアを配置して、着色等を行い、ジオラマ作りを行った。90分の授業であったが、３名共にフィギュアを選択してからは、各々のイメージする風景などのジオラマ制作に没頭した。（図10、11）学生たちは、「時間がたつの

が早い。夢中になって作ることが出来る」と述べ、出来上がった作品をサンプル作品として持参することとした。また、作品を作りながら、実際の活動日には、参加者の制作補助が出来るように、材料の扱い、絵具の混色について、水分と絵の具の適当な量、グルーガンの安全な使用法なども話し合い、活動がスムーズに行われるよう、サポート側の視点で検討を行った。

図10　筆者の用意した試作

図11　学生がサンプル作品を制作する様子

⑵　美術館における活動

①ワークショップ概要

「フィギュア de ペイントジオラマ」は企画展においても作品に用いられているフィギュアを使って、自由にジオラマを作るという内容のワークショップである。基本の材料は、予め用意した鉢の受け皿に石膏を固めておき、土台とした。そこに小石や人工芝、枝等を接着したり、石膏に絵の具でペイントを施したりして自由に表現を行うものである。以下は概要である。

日　時：８月24日㈯　午後１時～３時
対　象：特になし　小学生以下は保護者同伴
定　員：25名（予約先着順）
参加費：400円（材料費）
場　所：南公民館　５階
準　備：フィギュア、鉢受け皿、石膏、絵具、筆、水入れ、ぞうきん、新聞紙、グルーガン、ボンド、枝、小石、段ボール、人工芝、コルク、砂、ビーズ
企画、指導：奥西麻由子
制作補助学生：群馬県立女子大学４年生（３名）、跡見女子学園大学４年生（１名）【学芸員実習】

②活動の流れ

活動の流れは表２の通りである。ワークショップ開始１時間ほど前から会場の準備を行い、机や椅子を配置し、参加予定人数に対応できる場を作った。その後フィギュアと材料置き場に素材を置いておき、参加者が選択して好きな材料を取る。開始前であれば一度選んだものでも返却し、他のものと交換しても良い。しかし、フィギュアは作品に使用したいものをサイズに応じて１～２つを選択するように促した。早めに会場に来ていた参加者には、筆者が用意した作り方シートに目を通してもらい、制作の流れをつかんでもらった。予定開始時刻を５分ほど過ぎたところで参加予定者のほとんどがそろったため、ワークショップを開始した。初めに筆者が作り方を説明して、サポートに当たる学生の紹介を行った。学生は疑問点や道具の扱い方など分からないことがあれば教えて

くれると参加者に伝えた。（図12）

ワークショップ開始後は参加者は黙々と作業に取り組み、それぞれがイメージするジオラマ作品を作っていった。「丘を作りたい」、「宇宙のようなものを作る」、「夏だから海がいいかな」というような声も聞かれ、親子で来館した参加者は対話を楽しみながら、素材を配置し、絵の具で着色を行っていった。学生たちは材料が置かれた机で、素材を選択しに来た参加者の相談に乗りながら材料を渡したり、熱くなると危険が伴うグルーガンでボンドをつけてあげていた。45分ほどで多くの参加者が大まかな形やイメージを固め、その後の30分ほどでジオラマの細部を作る人、装飾を施す人など完成に近づけていった。最終的にフィギュアをつけ、完成させる様子が見られた。（図13、14）

最後に参加者同士で作品を鑑賞する時間を設けた。学生が一つのテーブルの材料を片付け、全員の作品を並べた。そしてお互いに作品のタイトルを述べてもらい、作品を通して交流した。（図15）

表２　ワークショップ活動の流れ

時間	全体活動の流れ	学生の活動
12：00～	会場準備	会場準備、机、椅子等の配置、材料の配置をする
12：45～	受付開始（美術館職員）	受付順に参加者に材料を選択してもらう
13：05～	ワークショップ開始、筆者による作り方の説明	説明の後に自己紹介を行う
13：15～	ジオラマ制作開始	参加者の制作補助を行う（絵具の塗り方、グルーガンでの接着、材料選択、汚れた場所の清掃、水入れの水交換　等）
14：30～	作品鑑賞会	机の片付けを行う
14：50～	ワークショップ終了、アンケート記入、あいさつ	物品等の片付け準備、持ち帰る作品の準備をする
15：00～	会場片付け	会場片付け、掃除を行う

図12　作り方の説明を行う筆者

図13　学生が個々に参加者の様子を把握する

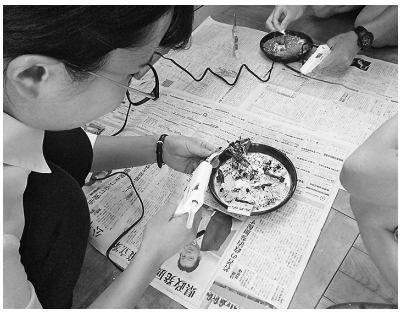

図14　グルーガンでの制作補助

図15　作品鑑賞会の様子

最後にあいさつを行い、本日の活動についてのアンケートを記入してもらい、ワークショップが終了した。その後学生は会場の片付け等を行った。

Ⅳ　考　　察

１.「アートマネジメント特講１」及び「アートマネジメント特殊研究１」における実践

⑴　学生のアンケート結果

①ボランティア活動前の意識

授業内で文化ボランティアについて講義を行った後、学生たちに「ボランティアに関するアンケート」とした意識調査のアンケートを行った。本アンケート結果は表３の通りである。

質問①を見ると主に授業を受講している２年生はこれまでに美術館のボランティアを行ったことがないといった状態であった。大学院生と他二名の学部生においては、近隣の美術館のボランティア体験があるが、今回の活動が初めてとなる学生がほとんどであった。質問②ではボランティアのイメージを尋ねたところ、「学べることが多そう」というイメージが高かった。次に「楽しそう」、「特にやりたいとは思わない」、「機会があれば参加したい」というイメージが続き、複数回答のためか様々なイメージを持っていることが分かった。また、ボランティアには「高齢者が多そう」というイメージが高く、「若い人が多そう」というイメージを回答した学生は０であった。講義の内容等からも高齢者の層が広いことを伝えたため、このような回答になったと思われる。最後の質問③では、今回の高崎市立美術館のボランティアに関するイメージを自由に記述してもらったが、表３の通り、積極的なイメージ、消極的なイメージと多様な回答が得られた。活動内容については事前に展覧会については筆者が伝えたが、当日の状況で作業内容が決定するため、「何をするかわからないから不安である」、「自分にできるかどうか」といった意見から、「何をするかわからないがわくわくする」「楽しみである」という意見までそれぞれのイメージが異なることが伺えた。

表３　ボランティア参加前の学生の意識

<table>
<tr><td colspan="6">①あなたはこれまで美術館のボランティアを行ったことがありますか？</td></tr>
<tr><td>はい</td><td colspan="3">4（群馬県立近代美術館でのワークショップサポート　3、栃木県立美術館　1）</td><td>いいえ</td><td>29</td></tr>
<tr><td colspan="6">②美術館のボランティアのイメージについてあてはまるものを選んでください</td></tr>
<tr><td>楽しそう</td><td>難しそう</td><td>気軽にできそう</td><td>学べることが多そう</td><td colspan="2">面倒くさそう</td></tr>
<tr><td>15</td><td>8</td><td>3</td><td>21</td><td colspan="2">9</td></tr>
<tr><td>若い人が多そう</td><td colspan="2">高齢者が多そう</td><td colspan="2">機会があれば参加したい</td><td>特にやりたいとは思わない</td></tr>
<tr><td>0</td><td colspan="2">11</td><td colspan="2">13</td><td>15</td></tr>
<tr><td colspan="6">③今回の高崎美術館のボランティア参加に対するイメージ</td></tr>
<tr><td colspan="3">・今活躍されているアーティストの活動に参加することで大きな学びの機会があると思います。（大学院生）
・どのようなことをやるのか具体的には分からないので不安がある。（大学院生）
・静かなところで黙々と作業をするイメージ。（２年生）
・どういうボランティアをするのかあまりイメージがわいていない。初めてなので楽しみ。（２年生）
・整理とか点検とかをする。（２年生）</td><td colspan="3">・できそうではあるけれど何となくつまらなそう。（２年生）
・人と接する作業が多い。（２年生）
・裏側が見れるから楽しみ。（２年生）
・どのようなボランティアの内容なのか気になる。楽しみ。（２年生）
・面倒くさそう。（２年生）
・単純作業めちゃ楽しそう。（２年生）
・展示をする場面を経験できるのは貴重なので楽しみ。（２年生）</td></tr>
</table>

・未知だけど新しい何かにふれられそう、わくわくします。（２年生） ・忙しそう。（４年生） ・何をやるのか想像がつかない。（２年生） ・考えることが多そう。（３年生） ・延々とした作業ができて楽しそう。（２年生） ・展示作品がポップでカラフルなので、作業も楽しみながらできそう。（４年生） ・短時間だが実りのあるものになるかなー？（２年生） ・自分にできるか。（２年生） ・展示内容が面白く、今までそういった展覧会のボランティアを行ったことがないため楽しみ。（２年生） ・楽しそう、バイトに近い何かがある。（２年生）	・作業を主にやるのかな、と思っています。集中する作業が多そう。（２年生） ・フレッシュ、活発そう。（２年生） ・どんなことをやるのかいまいちわからない。（２年生） ・実際に展示会で開かれるものを作る手伝いをするのは、とても楽しそう。（４年生） ・迷惑をおかけしないか不安。（２年生） ・企画が面白そうだなというイメージ、楽しそう。（２年生） ・元々ボランティアをよくやるのですが、美術館でのボランティアは初めてなので楽しみです。（４年生） ・若い人が多そう。（２年生）

（回答者：参加者33名　うち「アートマネジメント特講１」　受講者31名、「アートマネジメント特殊研究」受講者２名」）

②ボランティア活動後の意識の変化

次に活動終了後の授業で、同じく参加後の意識調査のアンケートを行った。本アンケート結果は表４の通りである。

質問１）「楽しかった」では、多くの学生が活動に対して「大変そう思う」、「そう思う」と回答しており、実際に単純作業を繰り返すというような展示作業の補助についても活動自体を楽しめたようである。また質問２）「大変だった」では、「そう思う」、「そう思わない」という学生がほぼ同数で学生によって個々の意識が異なることが伺える。そして質問３）「学べることがあった」では、多くの学生が「大変そう思う」、「そう思う」と回答しており、通常は見ることの出来ない、美術館の展示が出来上がるまでの過程に少しでも触れられたことが学びにつながったのではないかと感じる。

表４　ボランティア参加後の学生の意識

１）楽しかった				
大変そう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
20	8	2	2	1
２）大変だった				
大変そう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
2	12	5	11	3
３）学べることがあった				
大変そう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
12	16	4	1	0
４）今後も美術館ボランティアに参加してみたい				
大変そう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全く思わない
14	7	10	0	2

（回答者：参加者33名　うち「アートマネジメント特講１」　受講者31名、「アートマネジメント特殊研究」受講者２名」）

最後に質問４）「今後も美術館ボランティアに参加してみたい」では、「大変そう思う」、「そう思う」と回答した学生が３分の２ほどおり、今回の活動をきっかけに美術館のボランティアに少し興味を示したことが伺える。とはいえ「どちらともいえない」と回答した学生も多く、活動内容やその日の状況によってはマイナスのイメージなってしまったり、ボランティアという活動自体に興味を持てなかった学生もいることが分かった。

⑵　学生の感想

次に実際にボランティアを体験してきた学生の感想を見ていく事とする。以下が各日の参加者の感想の抜粋である。実際の活動内容と感想を記載し、期日までに全員が提出している。

【７月５日参加】
今回のボランティアで私がやらせていただいたのは、達磨に丈夫な両面テープを貼る作業である。達磨は球体ではなく、顔と胴体があり、その反対側は平面になっていた。円柱を縦に割ったようなものであった。それは美術館の一室の壁一面に貼るという作品の材料であった。この達磨は群馬の展覧会のためにつくられたものであり、達磨は群馬の達磨職人の方がつくられたと美術館の館長さんが仰っていた。達磨が顔と胴の部分のみになるものとは考えたこともなかったし、壁に貼るという発想も斬新なものであると感じた。作家である佐々木さんや美術館のスタッフの方は、壁に達磨を貼っていった。養生テープを等間隔に壁に貼り、その上に達磨を貼っていく。達磨にはわずかながら個体差があり、列が曲がっていってしまうことがある。達磨のサイズで列を調節したり、お客さんの目線より上の部分で微調節を行っていた。作品を制作する際、そして展示する際には鑑賞者の方のことを考えて展示することを改めて感じた。（３年生）

【７月６日参加】
７月６日㈯に展示のお手伝いをさせていただきました。もともと反復作業が好きな方なのでどんどん進んでいくのが楽しかったです。今まで美術展に行ってもどのように展示をしたのかは考えたことがありませんでしたが、実際にだるまの裏に両面テープを貼る作業を行って、ひとつひとつ人間が手を動かし協力してそれぞれの展示ができあがっているのだと感じました。強力な両面テープは養生テープの上に貼るというアイデアも学ぶことができ、学祭の装飾を行うときに実際に活用してみようと思いました。また、今回の展示のような壁全体に作品を貼るインスタレーションにおいては、アーティストと美術館（スタッフ）とのコミュニケーション、相互理解が必須であると感じました。そして、何よりもひとつの美術展に関係できたことがとても嬉しかったです。絶対に美術展にも足を運びたいと思います。大変貴重で素敵な経験ができました。ありがとうございました。（２年生）

【７月７日参加】
１、活動内容
７月７日㈰午前中の二時間、ボランティアに参加した。作業の内容は、本展示のチラシが入ったビニール袋にミシン目を入れて、来館者が切り取れるようにする、というものだった。この作品は、「美術館１階の入口近くに展示するもので、来館者が切り取っていくごとに形を変える参加型の作品である。」と説明された。作業は「ミシン目を入れる」と「カッターで切る」のみの単純作業であり、一緒に参加した三人と流れ作業で行った。
２、感想
今までに他の美術館のボランティアに参加したことはあったが、準備中の美術館の裏側の様子を見ることは初めてだったので、貴重な経験ができて良かった。また、実際にアーティストの作品制作現場を間近に見ていると、アーティストの方が「このままじゃ終わらない……」と漏らしていて、アーティストは最後まで色々な試行錯誤をしながら作っているということが分かった。今回は授業で全員が行うものだったので、自主的に他のボランティアにも参加してみたいと思った。（２年生）

【７月８日参加】
私は７月８日㈪の10：00から12：00までの２時間、高崎市美術館にて展示の手伝いをさせていただいた。小さな袋が複数連なったお菓子からインスピレーションを受けたという作品に関わった。three氏による作品はラムネやボーロの代わりに、折りたたまれた展覧会のチラシとカードが入れられ、それらがいくつも連なっていた。私たちが体験したのは、それらが一つ一つに切り離せるように切り取り線をつけるという作業だった。
切り取り線をつけるとそれぞれが切り離しやすくなるため、切り取り線をつけた後は作品が切れないように繊細に扱うよう心がけた。ひたすら切り取り線をつけるという単純作業ではあったものの、ポップでカラフルな作品に囲まれて行う作業は非常に楽しく、あっという間に終了予定時刻になってしまった。作業中の体感時間は１時間ほどであった。今回は授業を通して、作家さん本人と一緒に作品の展示作業を行うという貴重な体験をすることができた。楽しみながら作品展示の準備について知ることができてよかった。また、今回は２時間のみの作業であったが、あのような細かな作業を展示作品の数だけ行うのは大変なのだと実感することもできた。（４年生）

【７月９日参加】
作品制作作業をお手伝いしました。「take me」という、展覧会のカラフルなチラシが入ったビニールの小袋が連なったものが何本も天井からつるされ、来館者にチラシをもぎ取ってもらう参加型インスタレーション作品です。そのビニールをセロハンテープでつなげる単純な作業でしたが、目の前で展示作業を作家さんがされていて、一本ずつ見る手作業の合間にそれらが集まって徐々にできあがっていく全体像も見ることができ、完成に向けての期待と制作の達成感を感じながら取り組むことができました。また作家さんがライティングや展示順番など展示にこだわりをもちながら、作品の安全性に大変注意していて、自分の作品制作と展示について改めて考えなければならないと思いました。（修士１年）

多くの学生は制作補助としての単純作業を行ったこと、展覧会が作られていくまでの美術館の裏側や作家、学芸員の仕事にふれたこと、また普段見ることの出来ない現場の様子を体験できたことを有意義に感じたようである。初日と後半に参加した学生で活動内容の違いはあるものの、展示作業が終わるのかどうかといった作家や学芸員の声などを聞き、緊迫した中で展示作業が進んでいく事も体感したようである。また、大学院生においては自身の作品制作にも還元することが出来た。しかし中にはここで挙げた積極的な感想のみでない学生も見られた。具体的にはボランティアという活動自体、金銭が発生しない活動であることから、そこに不満に感じたり、なぜ美術館はボランティアでなければ人が来ないのかといった制度を疑問視する声も見られた。これらは一見消極的な意見にも捉えられるが、日本全体の文化活動を取り巻く問題でもある。いずれにしても活動前のイメージや意識が、実際にアートの現場体験を経験することで、学生個々の学びや問題意識の芽生えにもつながったと感じる。

２．学芸員実習における実践

⑴　参加者の様子

次にワークショップ参加者の作品の考察を行う。参加者は全員で22名（子ども21名、大人１名）であった。事前に予約をして参加したこともあり、全員が積極的に作品作りに取り組んでいた。筆者が持参したサンプル作品の中に海をモチーフにしたものがあったこと、季節が８月であることから海を作る参加者が半数以上を占めた。また、人工芝もプレート内に貼ることによりジオラマとしての存在感を増すため、参加者の多くが使用していた。

特に印象的な作品として図16のＡさん（小学生男子）は一人で会場に訪れ「ジオラマと聞いて作りたくて参加した」という。黙々と作業に取り組み、二つの動物フィギュアが陸と海をはさみ対決する様子を小枝を効果的に使用して表現していた。また、図17のＢさん（小学生女子）はフラットであったベースの鉢を「山にしたい」と新聞紙を重ねて盛り上げ、上に人工芝を巻いて最も高いジオラマを完成させた。当初新聞紙が崩れてしまうかと懸念したが、試行錯誤した後うまく山を作ることに成功し、他の参加者からも驚嘆されていた。図18のＣさん（小学生、中学生女子姉妹）は二人でゆっくり相談しながら作品を丁寧に作っていた。タイトルを「温泉」とし、要した素材を選択して情景を作り上げた。通常姉妹だと制作途中に言い合ったりすることが多いが、仲良く作業をしていた。最後に図19のＤさん（大人男性）は唯一の大人の参加者であった。集中して一番に作業を終了してジオラマの中に世界地図を作り「平和」というタイトルを最後に発表していた。「大人も楽しめるワークショップだった」と述べていた。

図16　Ａさんの作品

図17　Ｂさんの作品

図18　Ｃさんの作品

図19　Ｄさんの作品

⑵　参加者のアンケート結果

参加者にはワークショップ終了後、アンケートに回答してもらった。表５がその結果である。これを見ると質問①では多くの参加者が学校から配布されたチラシをみて申し込みをしたことが分かる。また、質問②ではプログラム内容や学生の対応に関してはほとんどや「とても良かった」、「良

かった」と回答している。開催時期、時間については参加者の多くが高崎市内から訪れており、すでに二学期が始まる直前ということもあり、夏休みの宿題としては提出できないという意見が多かった。しかし、全体的に質問③を見ると、親子連れで参加した多くの方がジオラマ作りを楽しんでいた様子が伺える。兄弟での参加も多く、家族で対話をしながら作品を作り上げていった。

表５　ワークショップ参加者のアンケート

①この催しをどちらで知りましたか？当てはまるものに○をつけてください。

チラシ	フェイスブック	市ホームページ	学校	知人	来館して知った
15	0	0	4	0	0

②本日の催し物で参加したプログラムについて、当てはまるものに○をつけてください。

	とても良かった	良かった	どちらともいえない	悪かった
プログラム内容	14	2	1	0
開催時期		12	7	0
開催時間		13	6	0
開催場所		17	2	0
学生の対応	14	4	0	0

③本日の感想や要望をご自由にどうぞ。

・大人も楽しかったです。
・楽しかったです。
・心底楽しめました、ありがとうございました。
・とても楽しかったです。またあれば参加したいです。
・楽しくジオラマが作れました。
・思ったよりとても楽しかった。
・初めて参加しました。難しいかなと思いましたが、子どもが好きに自由に作れてよかったです。
・ジオラマがとても難しいと思っていたけれど簡単だった。
・楽しかった。
・またやってみたいです。ありがとうございました。
・自由にできて楽しかったです。
・やさしく手伝ってくれたり、いいねといってくれた。
・夏休み中は時間を持て余しているのでこういうイベントがあると助かります。フィギュアや材料など持ち込んでもよかったなら、なお面白かったかな？と思いました。

（回答者：参加者22名中19名）

⑶　学生の様子

本活動に学芸員実習として参加した学生は、当日の会場準備、材料の配置、参加者の使用道具等の整理はスムーズに行うことが出来、ワークショップの進行が円滑に図られた。しかし参加者との対話や声掛けといった点では、初めての体験であること、どのように声をかけていいか分からず、積極的には行えなかったことが挙げられる。また、二時間程度の活動であったが、緊張や場に合わせた気遣いなどで疲弊していた。とはいえこのような教育普及事業では準備から実際の活動までの一貫を担うことが必要となる。今回の体験をもとに、学芸員実習の現場体験としては有意義なものとなったと考えられる。

Ⅴ　おわりに

本稿では高崎市立美術館における展示作業ボランティア、ワークショップのサポートという、二つの連携事業の報告を行った。二つの事業の形式も参加した学生も異なるが、いずれにしても学部２年生から大学院生まで多くの本学の学生が美術館との連携事業に携わることとなった。大学で

は、主に講義でアートマネジメントについて学んでおり、そこでは様々な美術館の運営について活発に学生から意見や要望が挙げられる。しかし、このようなアートの現場に実際に入り、活動を行うことで、学生自身が考えていた諸問題や課題に現実のものとして向き合い、実際に作家や学芸員、来館者（ここではワークショップ参加者）と関わることで新たな視点を得ることとなった。その視点は学生個々によって異なり、自身がアートにどう向き合うか、関わるかといったことを考えるきっかけになったといえる。アートマネジメントは理論と実践という双方の側面から様々な活動を体験する中で、芸術活動を支える側としての意識が変化していく。今回の連携事業はそのような意識の変化をもたらす一つの体験になったといえる。

今後の課題としては、今回の形式のような連携事業は次年度以降継続して行われるものではないため、反省を生かし、美術館との連携事業を緩やかにつなげていく事、また文化ボランティアに関しては、今後も積極的に学生の体験の場を提供することの二点が挙げられる。

（謝辞） 本事業を進めるにあたって、高崎市立美術館館長様、学芸員柴田純江様、谷津淑恵様、アートユニット three の方々には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

＊本研究は平成31年度群馬県立女子大学特定研究費「2019年度　群馬県内の美術館連携を図る教育普及プログラムの開発と実践」を活用したものである。

註

1）平成29年度のみ筆者の産前産後休暇、育児休暇取得のため本事業は行っていない。

2）拙稿『富岡市立美術博物館における学生による教育普及プログラムの開発と実践』群馬県立女子大学紀要35号、2014、pp.115-130参照

3）拙稿『群馬県立館林美術館における教育普及プログラムの開発と実践』群馬県立女子大学紀要35号、2017、pp.31-46参照

4）今年度は群馬県立館林美術館、群馬県立近代美術館、富岡市立美術博物館、大川美術館と連携事業を行っている。

5）毎年特定教育研究費で行った本ゼミの活動は記録集を発行し、群馬県内の美術館等に配布している。

6）ここでの活動の詳細については『2014群馬県立女子大学文学部美学美術史学科アートマネジメントゼミ　美術館連携記録集』2015、pp.10-11に詳細が記してある。

7）three（スリー｜川崎弘紀、佐々木周平、小出喜太郎）は、1986年福島県生まれの３人が、2009年結成したアートユニットで、国内外数多くのグループ展に参加するほか、2010年より個展「three is a magic number」を定期的に開催している。魚型しょうゆ差しやフィギュア、キャンディなど、嗜好品を大量に組み合わせたインスタレーションや立体作品により、現代社会が内包するさまざまな問題の視覚化を試みている。「地方と都市」、「群衆と個」など対極的でありながら複雑に絡み合う両者に対して問題意識を持ちながら、冷静かつシニカルなまなざしで向き合い続けている。今回の展示では three の代名詞ともいえる魚型しょうゆ差しを用いたインスタレーションやフィギュアを用いた作品、来館者と一緒に完成させる作品などの新作も紹介した。
（高崎市立美術館 HP 参照　https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2019042400028/　最終アクセス 2019/09/10）

8）本年は「アートマネジメント演習１」の授業で開発した普及プログラムの実践を３、４年生中心に７月28日に富岡市立美術博物館で「夏休みわくわくワークショップ」として開催し、ゼミで開発したプログラムを８月18日に群馬県立館林美術館で「キラキラ☆ビー玉万華鏡を作ろう」として開催するという予定になっていた。

9）2019年度シラバス「アートマネジメント特講１」参照
10）船木昭芳、湯原徹「ボランティアを活かす」小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄（編）『博物館教育論−新しい博物館教育を描きだす』ぎょうせい、2012、pp.176−179参照
11）とびらプロジェクト（編）稲庭彩和子・伊藤達矢（著）『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』青幻舎、2018参照
12）アーツ前橋では、年間五回の研修内容を含む「アーツナビゲーター」を募集し、対話による作品鑑賞をサポートしている。「おしゃべりアートデイズ」で来場者の鑑賞をサポートしたり、学校団体の鑑賞活動のサポートも行う。
（アーツ前橋 HP 参照　http://www.artsmaebashi.jp/?p=13551　最終アクセス　2019/09/10）
13）船木、湯原、前掲、p.176参照
14）2019年度シラバス「アートマネジメント特殊研究１」参照
15）美術館と筆者の打ち合わせの際、学芸員実習の日程の調整を行っていたことから、ワークショップの日程を踏まえ、ゼミの学生が行うというものではなく、このようなかたちとした。

【図の出典】
筆者撮影（図１～図19）なお、出典にあたり、学生及び参加者、美術館関係者には承諾を得ている。